

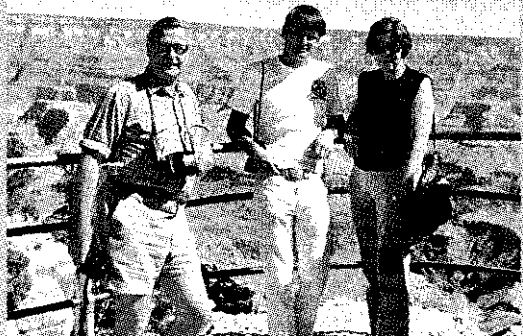
楽しい思い出

幼いころを思い出す度、いつも浮かんでくるのは、天気の良い日曜日、家族揃って出かけた遠足である。

1959年に引っ越した家からは歩いて5分程のところ、大きな森があって、子どもは探検やピクニックには最適な環境だった。



南山大学学長 ミカエル・カルマノ 26



両親と一緒にグランドキャニオンで

それでも、私の兄弟姉妹その、どこか新しいところに、
して特に自動車好きな私、行くことを、より楽しみに
は、車に乗って、少し遠く、していた。

ウサギ追いと学位論文執筆

まるで「よ」と言われ、しばらくの間、塩が入った振出し
を持っていったりしたが、

この遠足での結果はあまり芳しくなかった。私の夢の一つは、ウサギを捕まえることだ。だが、近づけば必ず逃げ出すウサギのスピードについて行けるはずもなかった。父に相談したら「ウサギのしっぽに塩を掛ければ簡単に捕

国立公園から、グランド・キャニオン、ラスベガス、デスヴァレー国立公園を経て最後にサンフランシスコに辿り着くという2週間の観光旅行を満喫してもらった。ラスベガスでスロットマシンに熱中して「5ポンドになったが、楽しかったわ」と、満足そうな顔で母が言ったときは、嬉しかった。

留学の最後の2年間、私が楽しんだのは学位論文の執筆である。インターネットやデジタル化されたデータベースのない時代、文献調査は全て紙媒体だった。が、開発されたこのプロダクトを使って、毎日のように大学のメインフレーム・コンピュータで論文のテキストを入力した。操作ミスで70分を削除してしまったこともあった。幸いに印刷されたテキストがあって再入力で済んだが、これに関しては「楽しかった」とは言えなかった。1983年春に論文を完成して、面接試験で「6500字を書いてあなたの結論は？」と聞かれて私は咄嗟に答えた。「学ぶことができる」とは、全て教えることもできると思うのは大間違い」と、審査委員会の先生方は納得したようであった。